京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第三十卷　第一號

昭和五年一月一日發行

大正四年六月二十一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）

新年特別號

所得稅に於ける累進率……法學博士　神戸正雄
限界經濟學……文學博士　米田庄太郎
マルクス價値論の價値論……文學博士　高田保馬
農家經濟の本質に關する一考察……經濟學士　八木芳之助
我國の救護制度……經濟學士　橋本文雄
資本主義社會の機構に於ける貨幣の地位……經濟學士　柴田敬
商業の本質及商業經濟學に就て……經濟學士　谷口吉彦
德川幕府と紙幣の發行……經濟學博士　本庄榮治郎
六大都市特に大阪市の租稅負擔……經濟學博士　汐見三郎
經營學の本質……經濟學博士　小島昌太郎
近着外國經濟雜誌主要論題

（禁轉載）

經營學の本質

小島昌太郎

一

經營學(Betriebslehre)の本質につき、先づ問題となるは、それが一つの科學であるか、若しくは、實學であるか、といふ點である。こゝに科學といふは、獨逸語にていへば reine Wissenschaft のことであり、英語にていへば pure Science のことであるが、實學といふのは、獨逸語にていはるゝ所の angewandte Wissenschaft、また、英語にていはるゝ所の applied Science とは、必ずしも同意味のものではない。むしろ獨逸語にては Kunde 若しくは Kunstlehre、英語にては practical Science といはるゝものが、これに該當するのではないかと思ふ。

私の解する所によると、廣く學問といはるゝものには、哲學を別として、その他のものは、この科學と實學とに大別し得ると思ふ。この二つは、いづれも智識の體系である。卽ち、整理せられ系統付けられて、一つの組織に編成せられたる智識である。併し、科學の方は、人間が、事象の本質を、卽ち事象の眞實を、知りたいといふ欲求から呼び起されて出來上つたものであり、實

學の方は、人間が何等かのことをなさんとするにつき、その目的を達成するに必要であり役立つ所の智識を持ちたいといふ欲求から呼び起されて出來上つたものである。故に、この二つは、智識の體系といふ點に於ては同じではあるが、科學の方は、事象の眞實を知りたいといふ立て前から、組織付けられた體系であり、實學の方は、具體的な或目的に役立たしめるといふ立て前から、組織付けられた體系である。從つて、この二つの學問は全く面目を異にするものである。

事象の眞實が果して現在の人間に分るかといふことは、或は問題であるかも知れない。併し、理性の許す範圍内に於て事象の眞實と認むべき所のものを、知り得る方法は、人間に與へられてある。それは知識相互の比較である。檢討である。そして、眞實と認め得るものを知るの方法は、實はこれより外にはない。檢討をせずして、たゞ見たまゝ、聞いたまゝ、思ひ付いたまゝの印象だけから成る知識では、まだそのものゝ眞實と認め得るものを知つて居るといふことは出來ない。眞實を知るには、どうしても、既に獲得して居る知識と、新らたに取り入れんとする知識との相互比較によるの外はない。この比較に於て妥當せざるものは眞實の知識と認められず、多くの比較に於て、益〻多く妥當するものほど、愈〻確かに眞實の知識と認められる。故に、事象の眞實と認むべきものを人間が知る場合には、必ずそこに二つ若しくは二つ以上の知識が比較せられた關係に於て、卽ち檢討せられた關係に於て存在する。換言すれば、二つ若しくは二つ以上の

知識が相互關聯の狀態に於て存在する。この關聯狀態にある知識が多くあるときは、その相互が比較せられて居るといふことにより、自ら一つの體系を成すことゝなる。科學は、かくの如く、檢討の手續を經て獲得せられたる、事象の眞實はこうであるといふ知識の體系である。

二つ、若しくは、二つ以上の知識が檢討せられるがためには、それらは同じ種類のものでなければならぬ。事象には、種々なる部面がある。例へば、有形のものを、何物か一つ取り出して見るにしても、それには色合があり、硬さがあり、長さがあり、重さがあり、音がある。從つて、吾々人間の知識にも、例へば色合に關する知識もあり、硬さに關する知識もあり、長さに關する知識もあり、また音に關する知識もあることゝなる。卽ち吾々は、事象のどの部面に着目するかによつて、吾々の知識に種類付けをすることゝなる。そして、今、吾々が、或事象について何等かのことを知らんとするのは、その事象のどれかの一つの部面に着目するのであるから、これによりて獲得する知識は、何等かの種類に屬するものである。吾々は、この知識が正確ならんことを期するために、――この知識が事象の眞實を把握したるものたらしめんがために――、これを他の知識と比較し檢討せんとするのである。併しこの比較、檢討にとり來る知識は、比較せられ檢討せらるゝ知識と同じ種類のものでなければならぬ。卽ち事象の同一部面に關する知識でなけ

ればならぬ。

色合は色合と比較することが出來る。硬さは硬さと比較することが出來る。併し、色合と硬さとは比較することは出來ない。この二つを對照して見ても、何等の意味をなさない。それと同樣に、經濟學的の知識は經濟學的知識を以て檢討することが出來るけれども、これを數學的知識を以て檢討することは出來ない。數學的知識を以て經濟學的知識を檢討するといふことは、意味なき事柄である。從つて、相互に比較せられ、檢討せられた關係によつて成り立つ所の知識の體系、卽ち一つの科學にあつては、これを構成する知識は、この檢討といふ關係によつて、自ら、同一種類の知識が集まることゝなる。一つの科學のうちに、種類を異にする知識が混在するといふことは、それ故に、あり得ないことである。科學が純正科學ともいはるゝ理由はこゝにある。

若し一つの學問のうちに、種類を異にする知識が混在するとすれば、その種類を異にするもの相互の間には、比較とか檢討とかいふ關係があるとは認められない。これらのものは、どちらからどちらへも、比較することも、また檢討することも出來ないものだから——。比較檢討せられた知識でないならば、それがいくつ集まつて居つても、事象の眞實を把握するといふことゝは無關係に存在するものである。從つて、若し、科學といふものを以て、事象の眞實を闡明する所の

ものである、といふことが認めらるべきものとすれば、かゝる種類を異にする知識が混在する學問は、科學とはいふことが出來ないものである。

知識相互の比較、檢討、――それのみが人間に與へられた所の、事象の眞實を認識する方法である。そして、かくて構成せらるゝ知識の體系が一つの科學といはるゝものであるから、事象の眞實を闡明せんがためにとる所の、知識相互の比較をなし檢討をなすといふ方法を、科學的方法といふのである。この科學的方法なるものが、人間がこれによつて、事象の眞實を把握する手段としてもつ所の唯一のものである。そして、この科學的方法によつて獲得した知識が、科學的知識といはるゝものであつて、これのみが事象の眞實を容れて居ると認めらるゝ知識である。

科學的方法によつて獲得した知識が、その科學的方法を經て居るといふ關係に於て、換言すれば相互に檢討せられて居るといふ關係に於て、何等かの事象に關し、一つの纏りたる體系として存在するときは、それが一つの科學である。この場合に於ては、對象となるものを要するは、言ふまでもなき所であるが、併しその對象は如何なるものであつても構はない、如何なるものであつても、科學の對象となり得る。また、その一つの纏りたる知識の體系が大なると小なるとは問題ではない。たゞ必要なることは、眞實を知らんとする目的を以て檢討せられたものたることである。換言すれば、眞實の知識を獲得せんとすることの外に、この場合には目的のないことであ

る。知識それ自體を目的とすることである。他の何等かの具體的の目的に役立つや否やは、全然、問題でないことである。

二

實學は、右に述べたる科學とは、全くその趣きを異にする學問である。人間は、何等か具體的な目的を達成するには、これに關係のある種々なる知識を必要とするものである。この或目的を達成するに必要な、それに役立つ所の知識の體系が、卽ち實學である。この場合にあつては、その目的に役立つといふことが必要條件であり、それがこの學問の存在理由である。それ故に、實學にあつては、これを構成して居る知識は、相互に檢討せられて居るといふ關聯狀態に於て、體系をなすのではなく、この學問が呼び起された所の具體的目的に、役立つか役立たないかによつて選別されて、これに役立つやうな配列に於て體系付けられて居るのである。

殊に、實學が科學と異る主要なる一つの點は、これにありては種類を異にする各種の知識が配列せられて居るものたることである。吾々の知識は、眞實を闡明せんとする立て前にあつては、前述の如く、自ら、一つの種類のものたらざるを得ない。併し、吾々が何等か具體的の目的を達せんとするがためには、一つの種類に屬する知識だけでは、如何にそれが秩序的に多く呼び集められて居ても、役に立つものではない。如何にその目的が些々たることであつても、それを實現

するには、諸般の事象に關する各種の知識を必要とする。例へば、一つの書籍を出版するにしても、その內容に關する知識は別として、用紙に關する知識、製版印刷に關する知識、裝幀に關する知識、著作權及出版法に關する知識、發行書店に關する知識、其他色々な事柄に關する知識がなければ、その目的を實現することは出來ない。故に、或目的に役立つことを目標として成立つ所の實學にあつては、その目的とする所のもの〻如何により、各種の知識が呼び集めらる〻ことを要するのであつて、それらが整理配列せられて、この學問が構成せらる〻のである。

實學は各種の知識によつて構成せらる〻ものであるが、これを構成する所の知識は科學的なる知識もあり、また未だ檢討を經て居ないがために、科學的知識といひ得ないものもあり、更に科學以外の知識もある。尤も、本當に或目的に役立つがためには、それは眞實の知識でなければならぬ。間違つた知識では役に立たないからである。本當に役立つ知識といふものは、實は科學的知識に外ならぬものである。そこで、當該目的の達成に關聯して、これに役立つ所の知識として、既に科學的知識となつて居るものがあれば、勿論これをとり來る。故に、實學には、各種の科學より、その具體的目的の達成に役立つ範圍內に於て、科學的知識が呼び集められる。そして、その實學の內部に於て、母體たる各科學の種類に從つて、自らそれぞれの配列をなすこと〻

なる。この呼び集められて、一つの配列にある科學的知識は、その母體たる各科學より見れば、いづれもそれの應用學、卽ち angewandte Wissenschaft または applied Science である。實學は、この範圍にていへば、具體的の目的に關して、多數の應用學の集合であるともいへる。

また、實學を構成するに當つて、それが目的とする所に役立つ知識が、未だ科學的知識として存在して居ない場合には、本當に役立つ所の知識を得るがために、事象の眞實を知らねばならぬ。それがためには科學的方法をとらねばならぬ。この點に於ては、實學と科學とは同一の研究方法をとることゝなる。併し、この場合に於ても正確に言へば、これは科學の研究方法である。實學を構成せんがために、先づその基礎たる所の科學的知識を獲得せんとするものであつて、その成果は第一次に科學に對する貢献となり、第二次にそれが實學に應用せらるゝに過ぎない。

併し、各種の科學は、今日、未だいづれも完成の途中にある。完全に出來上つて居るものは一つもない。また、今、目前に或目的を控えて、それに關聯する知識を科學的知識として打ち立てることは、さほど一朝一夕の容易な業ではない。然るに吾々は今日に生活して居る。生活して居る限り、必ず何等かのことをしなければならぬ。卽ち、何等かの目的をもち、何等かの計畫を立て、これが達成を試みなければならぬ。吾々の生活は現實の目的の達成を要求し、それは決して科學の完成を待つて居られるものではない。それを待つて居つては、吾々は何事も出來ない。と

もかくも、生活を進行しなければならぬ。それで、呼び集めらるべき科學的知識のない場合、または、直ちにそれが出來上らない場合には、完全なる出來榮えは期し得ないが、ともかくもその目的の達成に向つて日々の事務を進渉させるために、科學的知識といひ得ないものも多分に呼び集めなければならぬ。また吾々はそうして居る。例へば、混凝土建築に於ては、洋灰と、細砂と、礫砂との、最も適當なる混合割合としては、必ず何等かのものがあるべきであるが、それは未だ吾々に知られて居ないから、今日に於ては、ともかくも、これらを、一、二、四、の割合で混合するを普通の慣行として居るのである。從つて、混凝土建築といふ目的を達するに役立つ所の知識を呼び集めた學問にあつては、このことも、この學問を構成する知識としてその體系のうちにある。

かくの如く、實學を構成する知識としては、科學的知識もあり、科學的知識と未だいふことが出來ないものもある。また、それらのものも一つの種類のものではなく、多くの種類のものが呼び集められて居るのである。そして、それらが、こゝに呼び集められて居る標準は、その學問が自らを役立たしめんとする所の目的に適合するや否やにある。決して、事象の眞實を知らんがためのものではない。これが、實學が科學と同じく學問と呼ばれながら、その趣きを異にする所である。

三

經營學なるものは、右に述べたる意味に於ける科學であるか、實學であるか。これは經營學の本質に關する第一の問題であるが、併し、この問題は、實は、經營學の本質に關する第二の問題である所の、それは經濟學の一部門であるか、または經濟學とは別な、一個の學問であるか、といふことに關聯するものである。

私は、經營學なるもの〻意味の如何によつて、これは經濟學の一部門であるといふ見解も成り立ち、また、これを經濟學とは別な、一個の學問である、といふ見解も成り立つと思ふ。併し、それにはまた、經濟學なるものは、科學であるか實學であるか、といふことの見解を定めて置かねばならぬ。

私の解する所によれば、經濟學なるものは、吾々人間の生活のうちで、經濟生活なる部面を他の部面と區別して認め、この經濟生活のあらゆる事象の靜的及び動的本質を闡明することを職能とする所の學問である。故に、これは一つの科學である。それは經濟事象そのものを闡明することを目的とし、それが具體的の他の何等かの事柄に役立つや否やを目的として居るのではない。もとより、從來の學者が諒解する所の經濟學なるものは、必ずしも私がこ〻に述ぶるが通りの

ものである。例へば Diehl は次の如く説明する。

Schon seit langer Zeit besteht die Übung, den grossen Stoff der nationalökonomischen Wissenschaft in drei Teildisziplinen zu trennen und zwar:

1. in die theoretische Nationalökonomie;
2. in die praktische Nationalökonomie;
3. in die Finanzwissenschaft.

.....

In der theoretischen Nationalökonomie sollen diejenigen Erscheinungen des Wirtschaftslebens erklärt werden, die ganz allgemein, d. h. in allen Zweigen des Wirtschaftslebens sich vorfinden. Es sind die wichtigsten und typischen, die generellen Erscheinungen des wirtschaftlichen Lebens.

.....

Was ist demgegenüber die Aufgabe der praktischen Nationalökonomie, oder, wie wir sie besser nennen können, der speziellen Nationalökonomie? Sie handelt von den besonderen Erscheinungen innerhalb der wichtigsten materiellen Erwerbszweige. Der wirtschaftliche Tätigkeitsprozess vollzieht sich in der Form, dass die verschiedenen, dem Wirtschaftsleben dienenden Tätigkeiten in grossen arbeitsteiligen Berufs- und Erwerbsgruppen erledigt werden. Es haben sich grosse Erwerbszweige herausgebildet, die miteinander und füreinander den ganzen Wirtschaftsprozess durchführen. Diese Erwerbsgruppen sind:

1. die Zweige der Urproduktion (Landwirtschaft, Viehzucht, Bergbau, Fischerei usw.);
2. die Gewerbe (Handwerk, Fabrik, Hausindustrie usw.) und

3. der Handel und das Verkehrswesen.

Entsprechend diesen eben genannten drei Haupterwerbsgruppen zerfällt die praktische Nationalökonomie in drei Teile:

1. Agrarpolitik, wobei als wichtigster Zweig der Urproduktion die Landwirtschaft in den Vordergrund gestellt wird;
2. Gewerbepolitik und
3. Handels- und Verkehrspolitik.

Die Finanzwissenschaft ist die Lehre von der Einnahme- und Ausgabewirtschaft des Staates und der übrigen öffentlichen Körperschaften. In der Finanzwissenschaft wird nicht die Lehre vom Geld, Kredit oder Bankwesen behandelt, welche Gegenstände vielmehr zur theoretischen oder praktischen Nationalökonomie gehören; sie hat die engere Aufgabe, die Finanzwirtschaft der grossen öffentlichen Körperschaften darzulegen, wobei die Steuerlehre im Mittelpunkte steht.[1]

ソノ上には詳細に論議を盡す餘裕をもたないから、大略的な批評をすれば、Diehl が nationalökonomische Wissenschaft の第一部とする所の、いはゆる theoretische Nationalökonomie なるものは、大體私のいふ所の前述の經濟學、即ち經濟事象の本質を闡明することのみを職能とする所の一科學たる經濟學に當るものである。併し乍ら、その第二部として掲ぐる所のものに於ては、科學としての經濟學と認められないものを含んで居る。即ち、彼は、この第二部に praktische

1) Diehl, Theoretische Nationalökonomie. Bd. I, 2. A. p. 82–84.

Nationalökonomie と speziellen Nationalökonomie とを殆ど同一視して居るけれども、これは誤りである。その、いはゆる speziellen Nationalökonomie なるものは、彼もいふ如く、Sie handelt von den besonderen Erscheinungen innerhalb der wichtigsten materiellen Erwerbszweige であるから、これはやはり科學たる性質をもつものであつて、經濟學そのものゝ一部分、或はその特殊の部分をなす所の各論と見るべきものである。併し、いはゆる praktische Nationalökonomie なるものを以て、彼の解する所の如くに、Agrarpolitik, Gewerbepolitik 及び Handels- und Verkehrspolitik より成るものとすれば、それは、或る具體的の目的を達成するに役立つ所の知識の體系たるものであるから、これは科學ではなく實學である。從つて、そのなかには經濟學の知識も含まれて居るけれども、そのもの全體としては、經濟學の一部分たるものではない。

世間には、經濟學の各論なるものと經濟政策論なるものとを混同するものがある。併し、各論なるものは、當該科學の一部門であるが、政策論はそうではない。政策論なるものは、一つの政策に役立つ所の各種知識の體系である。政策は、いふまでもなく、或る具體的の目的を實現するために、とる所の手段方法であり、政策論は、或る具體的目的の實現には如何なる手段方法が最善最適なるかの研究である。卽ち、具體的目的の達成に役立つ所の知識を選定し呼び集めることである。故に、これは明かに私が前に述べたる所の實學である。經濟政策といはるゝものにあつ

ても、それに必要なるものは單に經濟學だけの知識を以て足るものではない。例へば、いはゆるAgrarpolitik にしても、單に農業に關する經濟學的知識のみを以て足るものではなく、作物、土壤、氣候、風土、法制、算數等の知識を必要とするは、更めて說明するまでもなき所である。故に政策論を以て、各論と同一視するが如きは、全然、單純なる誤謬である。

更に、若し、praktische Nationalökonomie なるものを以て、政策論の如きものより成るものとせば、單にそれは國家その他の公共團體の立場よりする所の政策論なるものを包含するのみならず、各人が例へば商業は如何に實行すべきか、工業は如何に實行すべきか、金融業は如何に實行すべきかといふ研究もこれに含まれなければならぬ。これらは、政策論なるものと、たゞその假定立場を異にするに止まり、實質的には異る所がないからである。そしてかゝる意味の研究は、やはり、實學に屬するもので、經濟學といふ科學の一部分たるものではない。そして、その屬する所の實學が如何なるものかといはゞ、それは、後に述ぶる所の經營學に外ならぬものである。

Diehl が、nationalökonomische Wissenschaft の第三部として擧ぐる所の Finanzwissenschaft なるものが、如何なるものであるかは、彼の說明の範圍內に於ては不明であるが、若しそれが die Einnahme- und Ausgabewirtschaft des Staates und der übrigen öffentlichen Körperschaften といふ經濟事象の本質を闡明するものであるならば、やはりこれは科學たる經濟學の一部門である。併

し乍ら、若しそれが、國家その他の公共團體が如何にすれば、最も適當なる方法に於て最も多くの Einnahme を擧ぐることが出來るか、また、如何にすれば、最も少き Ausgabe によりて、最も適當に國家目的を達成することが出來るか、といふことを研究するのであるならば、それに要する知識は、經濟學上の知識だけでは到底不十分であつて、各般の知識を必要とするものであり、然るときは、いはゆる Finanzwissenschaft は、これらの各種の知識の構成よりなるものとなるから、一つの實學となり、そしてその實學はこの場合にありては、Diehl がいはゆる praktische Nationalökonomie と同じく、私が後に述ぶる所の經營學に屬するものである。

Die Lehre vom Geld, Kredit oder Bankwesen なるものは、Diehl もいふ通り、Finanzwissenschaft に屬するものではない。若しそれが、Geld, Kredit oder Bankwesen なる經濟事象の本質を闡明することを以て職能とするものであるならば、科學たる經濟學の一分科である。併し、それが、國家の政策若しくは私人の目的を達成するに役立つ知識、若しくは Bankgeschaft の實行に必要なる知識といふ意味に於て取扱はるゝならば、それは實學を成す所のものとなる。そしてこの場合に於ても、それは經營學に屬するものである。

四

經濟學は、右に述ぶるが如き一つの科學であると私は思ふ。故に、それは研究の對象をもつ。

その對象はいふまでもなく經濟である。併し、この經濟の何であるかは、私の見る所は、從來の見解と、多少異る。この點は、既に簡單に述べたることもあり、[1] また他日詳論せんと欲する所であるが、こゝに經濟と經營とを對照して、私の見る所を極めて略說すれば次の如くである。

經濟といひ經營といひ、この二つは、いづれも人類が物的資料の獲得使用をなして行ふ所の生活の部面相である。人類の物的生活そのものを全面的に經濟といふのでもなく、經營といふのでもない。人類の物的生活は動物のそれとは根本的に異るものがある。動物のうち集團生活をなすものにあつても、その物的生活を統制して居るものは、今日の動物學の敎ゆる所によれば、たゞ彼等の本能だけである。人類も、勿論一つの動物として、その物的生活は本能に統制せられて居る。併し人類の場合にあつては、本能の外に知能も亦これを統制して居る。そしてその知能は、社會生活をなす場合には、更に指導意思と交換原則となつて見はれる。

この場合に指導意思といふは、何等かの目的を以て、これに適合する所の結果を生ぜしむる方向に、物的資料の獲得使用の行動を、秩序づける考へである。交換原則といふは、人々が、その欲求する所のものを、他人より獲るがためには、その他人の承諾を必要とするといふ定めである。故に、これは本來、承諾の原則といふ方がよいやうであるが、併し、各人が物的資料を以て生活を維持するものなる關係上、この他人の承諾を得るがためには、原則として、欲求者もま

1) 保險本質論 第二版 第一章第一節 及 保險學要論 第一章第一節 參照

た、その他人の承諾する所のものを、その承諾する所の質、量、數に於て提供するを要するのであるから、この意味に於て、これを交換の原則といふのである。

經濟といふは、この交換原則に統制せられて居る所の、人類の物的生活の相である。詳言すれば、經濟とは、交換原則の下に於て、人類が、その生活に要する物的資料を、獲得使用することによつて生ずる所の有機的現象である。併し、人類の物的生活には、前述の如く、指導意思によつて統制せられて居る部面相もある。それが卽ち經營といはるべきものである。この意味に於て、いふ所の經營は廣義のものであつて、卽ち、一つの指導意思により、人類が、その生活に要する物的資料の獲得使用をなす所の計畫的行動である。

經濟も經營も、かくの如く、人類の物的生活なるものが、異る所のものによりて統制せらるゝによつて生ずる所の、部面相である。併し、この二つの部面相は、相離れて居る場合もあり、また相重つて居る場合もある。卽ち經濟の場合にあつては、常に必ず、交換原則の統制の下にあるを要するけれども、指導意思により統制せられて居るや否やは全く問ふ所ではない。また、經營の場合にあつては、それは必ず常に、一つの指導意思の下に統制せらるゝことを要件とするけれども、交換の原則の下にあるや否やは問ふ所ではない。故に、交換原則と指導意思とが同時に、吾々の物的生活を統制して居るときには、經濟と經營とが相重つて存在し、その一方のみが統制

して、他方が統制せざる場合には、經濟か經營か、そのいづれかがあるだけである。

即ち、社會經濟、國民經濟、國際經濟竝びに世界經濟なるものには、交換原則が統制して居るだけであつて、指導意思が統制して居るのではない。故に、それらは、經濟と認むべきものではあるが、經營ではない。併し、これと反對に、原始人類の生活が血緣を中心とする團體の下に自給自足の狀態にて行はれ、物的資料の獲得使用は、その團體の首長たるもの丶指導意思によりて統制せられて居つた場合には、たゞそこに經營があるだけで、未だ經濟は存在しない。Bücher は、かゝる物的生活を die geschlossene Hauswirtschaft と名づけて居るけれども、かくの如き Verkehrslos の狀態を經濟と名づくれば、經濟といふこと丶物的生活といふこと丶が同じこと丶なり、特に經濟なる名稱をこれに與ふるの意味を失ふ。故にかくの如き狀態は、經濟未生の狀態であるといはねばならぬ。

今日にありては、如何なる物的生活も、苟も人類が社會をなしてこれを行ふ限りは、皆、經濟の下にある。吾々個人の物的生活や、會社の事業が、それぞれの指導意思によりて統制せらるゝと共に、それはまた、交換原則によりて統制せられて居る所の、社會經濟、國民經濟、國際經濟、世界經濟のうちに包被せられて居る。それと同樣に、國家の政務に關する物的生活、即ち財政も亦、國家當局の指導意思によりて統制せらるゝと共に、社會經濟、國民經濟、國際經濟、世

界經濟のうちに包被せられて居るのである。故に今日にありては、總ての經營は經濟のうちに包被せられて居る。そして然る限りに於て、人類の物的生活は指導意思と交換原則とによりて同時に統制せられて居るのである。

私は、人類の物的生活に、交換原則に統制せられて居る部面相と、指導意思に統制せられて居る部面相との、二つを分析的に觀察し、その交換原則に統制せらるゝによりて生ずる所の有機的組織を經濟と名づくべきものと思ふ。そして、その場合に、交換原則の統制によりて生ずる所の有機的組織の擴がりを、地域より遊離して抽象的に考察するときは、社會經濟なる概念を得ることゝなり、また、この有機的組織の地域的擴がりに着目すれば、地方經濟、國民經濟、國際經濟、世界經濟なる概念を認め得るものと思ふ。そして、人類の物的資料の獲得使用が、一つの指導意思に統制せられて、計畫的行動となれるものを、私は、廣く、一般に經營と名づくべきものと思ふのである。

もとより、これは命名の問題であるから、元に歸れば、いづれをいづれと名づけても差支ないものであらう。併し、今日までの學者が、言ひ表はさんと欲して十分明瞭に表明し得なかつた所を、表明すれば、かくの如くに解するの外なきものであると思ふ。殊に、術語は吾々の學問に於

では、數學に於ける公式にも比すべき、論理進行の宿場である。これを足場として更に進行發展すべきものであるから、たゞ單なる名辭の問題ではない。J. S. Mill も "Differences of language are by no means unimportant, even when not graunded on differences of opinion; for though either of two expressions may be consistent with the whole truth, they generally tend to fix attention upon different parts of it"[1] といふ。況んや、均しく物的生活であるといつても、これを統制する所のものを異にするにつれ、異る相を呈するに於ては、別異の名辭を必要とするは多く辯ずるの要なき所であらう。

然るに、從來の學者は、動もすれば、私が經營と名づくべきものと見る所のものを以て、經濟と名づけんとするものがある。例へば、Siegfried Lederer は經濟なるものを次の如くに說明する。

Die erste Regung organischen Seins, der Wille zum Leben, äussert sich in dem Streben, Bedürfnisse zu befriedigen. Der Mensch hat zweckmässige Methoden gefunden, damit dies umfassend und planmässig geschicht. Sonst kennen in dem weiten Reiche der Natur bloss die Bienen und die Ameisen eine Vorsorge für die Zukunft. Aber während hier das Leben unabänderlich und instinktgemäss abläuft, verändert der Mensch nicht nur seine Tätigkeit, sondern auch die Bedürfnisse aus dem Naturzustande zur Zivilisation. Die geordnete Tätigkeit zur Befriedigung der Bedürfnisse bezeichnen wir als Wirtschaft.[2]

併しかくの如きは、一方に於ては、未だ經營なるものについて明確なる概念をもたず、他方

1) J. S. Mill, Principles of Political Economie; (Ashley's edition) p. 44.
2) Siegfried Lederer, Volkswirtschaft, Theorie und Politik. (Pilsen 1924) S. 7.

に於ては、人類の物的生活に於て統制する所のものとして、單に指導意思あることのみを認めるだけで、交換原則なるものも亦均しく統制を行ひつゝあるに氣付かずして、單純なる物的生活より經濟なるものを區別して說明せんとしたるより、生じたる見解である。

五

私は既に、經濟と經營との區別を述べ、且つ經濟學の如何なるものなるかを略說した。よつて愈〻、こゝに經營學の如何なるものなるかを說明しなければならぬ。

經濟學なるものを以て、私は、經濟事象の本質を闡明する所の學問であると述べた。經營學は、然らば、これと同じやうに、經營事象の本質を闡明する所の學問であると見做すか。私は、勿論、かゝる見解も成り立つと思ふ。併し、然る場合には、經營學は一つの科學たる經濟學の一部門たるに過ぎないものとなる。何となれば、前に述べたるが如く、總ての經營は、經濟に包被せられて居る。經營として行ふ所の、物的資料の獲得使用は、今日、必ず常に、交換原則の統制の下にある。この交換原則の統制の下にある所の、物的資料の獲得使用に關する事象の本質を闡明するは、卽ち經濟學に外ならぬからである。

或は、經營として行はるゝ所の物的資料の獲得使用の行動のうちにあつても、交換原則の統制を受けざるものがあるが故に、この部分の經營事象の本質を闡明することは、經濟學に屬する職

能ではなく、從つて、こゝに經濟學とは別な學問として、經營學の成立を認め得ると考へるものがあるかも知れない。然り、然る場合に於ては、その方面の學問は確かに經濟學の領域には屬しない。併し、それが、かゝる事象の法的方面より、その本質を闡明せんとするものであるならば、それは法律學の一部分であり、また、かゝる事象の技術的方法より、その本質を闡明せんとするものであるならば、それは、何等かの技術學 (Technischelehre) の一部分となるものであり、要するに、その意味の經營學は、何等かの學問の一部分となるに過ぎないもので、獨立の科學となるものではない。

然るに、Nicklisch の如きは、經營學を以て、經營事象の規律性を闡明するを以て職能とする學問で、經濟學とは別な獨立の學問であると說明して居る。即ち、次の如くに曰ふ。

Neben der Volkswirtschaftslehre steht heute die Betriebswirtschaftslehre.

Im Mittelpunkte dieser Wissenschaft steht die Unternehmung, der Betrieb. Sie sucht die Gesetzmäsigkeiten des Betriebslebens zu erforschen und darzustellen. Dabei unterscheidet sie Zusammenhänge, die für das innere Leben der Betriebe von Bedeutung sind, und andere, deren Bedeutung im Verkehr der Unternehmungen miteinander zur Geltung kommt. Im akademischen Unterricht wird deshalb von einer wirtschaftlichen Betriebslehre und von einer betriebswirtschaftlichen Verkehrslehre als Teilgebieter der Betriebswirtschaftslehre gesprochen. Sofern dabei nur an Industrie und Handelsunternehmungen gedacht wird, werden die Teilgebiete als kaufmännische Betriebslehre und als Handelslehre bezeichnet. Weit entwickelt ist auch die landwirtschaftliche Betriebslehre.[1]

1) Nicklisch, Wirtschaftl. Betriebslehre. 6. A. 1922. p. 1.

併し、そのいふ所の Betriebsleben の Gesetzmässigkeiten を erfolschen し darstellen することは、經濟學そのものゝなす所に異る所なきものであり、經營內部に於て重視せらるゝ諸關係と、企業相互間の交通に於て重視せらるゝ諸關係とを分別觀察するといふことも、それがため何等この學問を經濟學より本質的に分つことゝはならない。何となれば、企業相互間の交通に於て重視せらるゝ諸關係は、要するに交換原則に統制せらるゝ所のものであり、經營內部に於て重視せらるゝ諸關係といふものも、——恐らく、それは原價計算とか、會計整備とか、能率增進とか、生產費低減とかの事象を指稱するものと思はれるが、——それらが重要視せらるゝ所以は、外部に於ける交換原則の統制に關聯するがために外ならぬ。故に Nicklisch の說明は、經營學が經濟學の neben に steht する所以を說明して居らないといふの外はない。

Lehmann は、Nicklisch と異り、經營學を以て明かに、經濟學の一部門と認める學者である。卽ち次の如くに曰ふ。

Die Betriebswirtschaftslehre——der jüngste Zweig der Wirtschaftswissenschaften zeichnet sich dadurch aus, dass sie sich einerseits als ein Teilgebiet der reinen Wissenschaft die Aufgabe stellt, die Lebensbedingungen und Lebensäusserungen der Produktionssphäre angehörigen Einzelwirtschaften, eben der Betriebswirtschaften, zu verstehen und zu erklären, und dass sie sich andererseits als Kunstlehre bewusst in den Dienst praktischer Zwecke stellt.[1]

1) Lehmann, Allg. Betriebswirtschaftslehre, Vorwort p. iii.

彼が、第一段に於て經營學を以て經營の生活條件と生活表現とを闡明する所の純粹科學であるとなす範圍内に於て、これを經濟學の一部門であるといふは、名辭の適不適は別とし、その限りに於ては論理を一貫せる見解である。けれども、その第二段に於て、この學問を以て、現實の何等かの目的に役立つ使命をもつ所の Kunstlehre と認むる限りは、その範圍内に於て、これを一つの科學である所の經濟學の一部門と認むるは、前に詳細に述べたるが如く、不當の見解である。——勿論、この點については、Lehmann は詳しい説明を加へて居るが、[1] その説明あるに拘はらず、私はこの見解を不當と認める。その理由は前に實學の説明のうちに既に簡單に述べてあるが、他日また詳しく述ぶる機會があらう。

Leitner は、經營學といふ名稱を用ゐないで、企業私經濟學、卽ち Privatwirtschaftslehre der Unternehmung といふ名稱を用ゐて居る。併し、その名稱の如何に拘はらず、この書の第一版に取扱ふ所のものについて見れば、他のいはゆる經營學と大差あるを認むることが出來ない。かゝる企業私經濟學なるものを以て、彼は如何なるものと認め、それと經濟學とは如何なる關係にあると看做すか。彼は次の如くに曰ふ。

Die Privatwirtschaftslehre der Unternehmung ist ein Teil der Wirtschaftswissenschaften, d. h. ein Teil jener

1) a. a. O., S. 16–18. 參照

Wissenschaften und Lehrdisziplin, die sich die Erforschung der menschlichen Wirtschaft als Objekt zum Ziel setzen.[1]

即ち、企業の私經濟學なるものは、人類の經濟といふものを對象として研究するを目的とする所の、科學たる經濟學の一部門であると見るのである。從つて、企業の私經濟學なるものは、簡單に言へば、企業なる經濟事象の動的竝びに靜的の本質を闡明するを以てその職能とするものと解すべきである。併し、彼が、その著作に於て取扱ふ所は、企業の經濟事象なるものが如何なるものであるかを、平純な立場から闡明せんとして居るのではなく、多くの場合に於て、私經濟の立場から、詳言せば私經濟の發展に貢献し役立つ所の學問を構成しやうといふ立場から、論述せられた跡を多く殘して居る。故に、然る限りに於て彼が構成せんとする所のものは、純然たる科學としての經濟學ではなくして、他の經營學者と同樣に、寧ろ一つの實學である。

併し、Leitner は、他の經營學者と、次第にその傾向を異にすることゝなり、私經濟若しくは企業の經營なるものに役立つ所の知識を蒐集整理するといふ立場より脫して、「私經濟の立場より」といふ態度を捨てゝ、平純に企業なるものゝ動的竝びに靜的の本質を闡明し、有機的組織たる經濟のうちに於ける企業なるものを見んとするに至つた。彼がその著書の第五版に於ては、"Wirtschaftslehre der Unternehmung" と改題して Privat なる文字を取去つたことは、この間に於ける彼の研究的立場の推移を物語るものと見ることが出來るであらう、そして、かくの如くに

1) Leitner Privatwirtschaftslehre der Unternehmung, S. 1.

して、その研究は初めて經濟學の一部門たる地位を占むることゝなるのである。

企業經濟學なるものが、經濟學の一部門たる地位を占むるは當然である。そして經營學なるものを以て、經濟學の一部門と認むる見解をとるならば、その名稱を何と名づくるかを問はず、このLeitnerと同樣の立場をとらなければなるまい。かゝる見解も、またかゝる意味に於ける經營學なるものも、成り立つことを得るは疑がない。併し、それは、今日、新らたなる學問として成り立たんとする所の經營學と全く異る過程を辿るものと言ふの外はない。

私は、今日、新らたに成立せんとする機運にある所の經營學なるものを以て、經濟學とは別な獨立の學問として成り立たんとするものであらうと思ふ。この經營學を以て、經濟學とは別な獨立の學問であるとする以上は、これは經營事象の本質を闡明せんとするものではなく、むしろ經營に於ける目的――指導意思の目ざす所――を實現するに必要なる、諸種の知識の體系よりなる學問と、解するの外なきものと思ふ。そして、この見解は、經營學の學者達が、その學問を如何に解說し居るかに拘はらず、彼等が實際に取扱つて居る所に最もよく適合するものと思ふ。

この意味に解せられたる經營學は、科學ではなくして、前に述べたる實學である。從つて、それは對象なるものをもたずして、たゞ或る指導意思の目的とする所を、實現するに最も適當な

る、そしてまた最も役立つ所の知識を、各種の科學その他より呼び集めて、これをその目的に從つて整理し、體系に構成するにある。卽ち、この意味に於ける經營學は、一口に言へば、經營に役立つ學問である。詳細に言へば、人類が、一つの指導意思の統制の下に於て、物的資料の獲得使用をなす所の計畫的行動をなすに當り、これに役立つ所の知識を整理配列したる體系である。故に、この學問は、知識それ自らを目的としたるものではなく、具體的の目的に役立つことを目的とするものである。私は、最近、新らたに成立せんとする經營學なるものを、かくの如きものであると解して初めて意義あるものと思ふ。

併し、私が右に述べたる所は、廣義の經營學である。この意味に於ける論著は、今日、私の知る限りに於ては一つも見當らない。今日、世に行はるゝ經營學の論著は、殆どすべてが企業といふいはゆる私經濟の立場から、その經營に必要な、若しくはこれに役立つ所の知識が、整理配列せられた體系である。そして、それらの論著は、經濟學の知識を主要部分とするけれども、その外に、法律學の知識、會計學の知識、算數の知識、事務取扱ひ竝びに事務整理の知識などが配列せられてある。故に、それは經濟學とは別な獨立の學問であつて、かゝる學問が成立して初めて、經濟學、法律學等々の科學知識が企業の經營といふ現實の目的に役立つことゝなるのである。併し、この意味の經營學は、科學ではなくして、明かに實學である。

私は、かゝる意味の經營學なるものが成立の根據をもつこと、並びにかゝる學問が吾々の生活に於て必要なること、そして他方に於ては、科學たる經濟學も、かゝる經營學の發達に刺戟せられてまたよりよき發達を遂げるものなることを信じて疑はないものである。併し乍ら、經營學なるものは、必ずしも、企業の經營に關してのみ成立すべきものたるの理由を知らない。單に企業といふ範圍内の指導意思の下に於て、人類が物的資料の獲得使用をなすに役立つ所の知識の體系の外に、廣く、一般に、如何なる指導意思たるを問はず、その下に於て人類が物的資料の獲得使用をなすに役立つ所の知識の體系たる學問が成立し得るについて何等の疑をもつことが出來ない。故に、企業の經營學の外にも、幾多の目的について經營學が成り立ち得ると信ずる。

國家が、その全國民の物的資料の獲得使用の總ての行動を、一つの指導意思によりて統制することがありとすれば、それは一つの經營であり、それに役立つ所の知識の體系は一つの經營學である。また、國家が、その政務を遂行するに必要なる物的資料の獲得使用を、一つの指導意思によりて行ふ所のいはゆる財政は一つの經營である。故に、財政の遂行に役立つ所の知識の體系は、今日の財政學の一部門であるが、それも經營學である。更に一つの會社が、それ自らの經營に役立つ所の知識を、整理配列したる一つの體系に構成すれば、それも一つの經營學である。また、一般的に商業の經營に必要なる知識、工業の經營に必要なる知識、農業の經營に必要なる知

識を、それぞれ整理配列したる體系をつくれば、それらはいづれも一つの經營學であつて、この場合には、商業經營學、工業經營學、農業經營學と名づくることが出來る。更に、一般の家庭に於ける家事の經營に役立つ知識を整理配列したる體系も、一つの經營學であつて、これは家事經營學といひ得るであらう。そして、これら總てを總稱するときは、それが廣義の經營學である。

私は、右に述ぶる所により、廣義の經營學及び各個の經營學の如何なるものであるかを概說した。廣義の經營學なるものは、前にも述べたるが如く、人類が、一つの指導意思の下に於て、物的資料の獲得使用をなす所の計畫的行動に對して、役立つ所の知識を整理配列したる體系であるといふことが出來る。併し、これは、經營學といふものは、一般的に言へば、かくの如きものであるといふ意味のことだけであつて、かくの如き經營學なるものが、一定の內容をもつて、現實に成立し得るものなるをいふのではない。何となれば、人間の指導意思なるものは、具體的に何等かの目的と關聯して初めて存在し得るのであつて、廣く一般に指導意思といふても、その場合には抽象的名辭たるに止まり、從つて、これに役立つものといふも、具體的には意味なきものであるからである。故に經營學なるものは、具體的には、必ず、各個の經營學としてのみ成り立つものである。これを狹義の經營學といふ。

この狹義に於ける經營學、卽ち各個の經營學なるものは、それが自らを役立たしめんとする所

の具體的目的の如何により、實に幾多の形態を以て成立し得るものである。何となれば、人間の物的生活に於ける具體的目的なるものは、大小廣狹、實に千變萬化限りなきものであるからである。この各個の經營學の如何なるものなるかについては、前に一言これに觸れたる所があつたが、それが說明は更に詳細の論を要する所である。併し、本論は、經營學の本質を明かにするを目的として起稿したるものであるから、こゝに筆を止め、廣義の經營學と狹義の經營學との關係、殊に、それが大小廣狹、千變萬化の形態を以て成立し得る所以は、次の機會に於　これを詳論するであらう。

——四・一二・二一——